ビジネス文書の書き方読本(2)
―産業日本語研究会 ライティング分科会編について―

On “How to write business documents Part 2 / Writing Subcommittee Edition”

東京外国語大学　大学院総合国際学研究院　教授
佐野　洋
株式会社東芝を経て、1995 年から東京外国語大学に在籍。

sano@tufs.ac.jp　TEL 042-330-5376

1 はじめに

1.1.　書き方読本

ビジネス文書 / 書き方読本（試案）（[1]、以下「書き方読本（試案）」）は、ビジネス文書 / 書き方マニュアル（[2]）を土台として、産業日本語研究会・ライティング分科会（以下、「ライティング分科会」）が進めている取り組み－ライティングという所作の背後にある思考の様式が表現スタイルにどのように反映されるのかを明らかにしようとする取り組みの成果である（[3]）。ライティング分科会は、ライティングという所作を物事の表し方と報告の心得、つまり知識を適切な表現で想起し（概念）、知っていることから知らないことを推察した上で（推論）、物事を分別したり評価したりすること（判断）ができるような技能（文章の構成法）として捉えている。このような文書の目的は、読み手が文書内容を理解（納得）し、その理解に則して行動変容を起こすことにある。これまでに本分科会は、文章の構成法としての筋書きの型に、説得型と共感型の 2 つの表現スタイルがあることを提案した。それぞれが思考の基本である概念の作り方と、その作り方に応じて出来事（動き）の捉え方に違いが生じることを示してきた（[1]）。その違いは出来事連鎖の叙述法（推論過程の表出）に強く連関する。

1.2.　概念と意思決定

日本語文章 / 書き方マニュアルの中で示した文書作成モデル（[2]）の中で、横井は、文書を作る一連の行為の前段を具体的な言語表現が表出される前段の思考過程を発想段階と呼び、叙述行為の特徴では断片発話やメモといった表現が見られるとした。メモ書きとはいえ伝達する対象や目的は明確であるから実質的には思考をまとめる（概念間の関係を固定する）段階である。この段階は、何を主題とし、想起されるいくつもの出来事群を背景にそれらを活かして、どのように道筋を立てるかという叙述行為の意思決定－つまり判断の段階でもある。

一般に論旨展開の筋書きがあって、はじめて文（文章）表現の戦略があると考えられるが、ライティング分科会では、文章の筋書きの表出過程（筋書きの二つの様式差）を詳らかにするために、処方的ではなく規範的な取り組み姿勢で臨み、表現行為の原因となる思考のメカニズムを知ろうと試みてきた。その結論として実在の基本となるモノを表す記号の象徴的な概念には形姿・外形実在のモノと内実・役割実在のモノの二　種類あることを主張した（[3]、[4]）。

前者は不動点を離散化の尺度として分節した記号表象を使い、量化されたモノ（数える）世界を描き、ある出来事とより後の出来事間の推移（演繹的な推論）を選好し、概ね確定的（決定論的）に結論付ける（判断する）傾向にある。一方で後者は、不変点を離散化の尺度として分節した記号表象を用い、関係化されたモノ（関わる）世界を描く。ある出来事とより前の出来事の関連（帰納的な推論）を好み、総じて仮定的（確率論的）に判断する傾向があることを明らかにした（[4]：58 頁の図 13 から引用）。

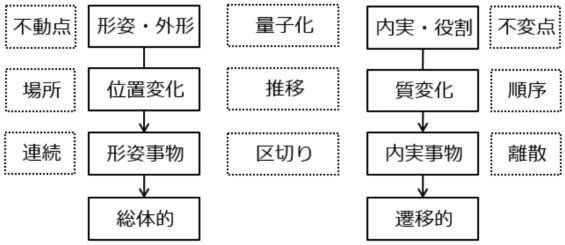

図 1　区切方の違い（ [4]：図 13 から引用）

形姿事物の推移である位置変化の動きは、その概念化特徴として終了までの時間経過を見積もる（総体的である）ので連続時間を創造する。いわゆる眺望的な見方によって動きが概念化でき、この基本特徴から動きの概念の拡張方向が未来（予測）志向に偏るほか、思考様式は時間順行の推論（演繹推論）に偏る。

内実事物の推移である質変化の動きは、現状状態を起点として時間逆行の推察を伴う動きの概念化が特徴である。現状状態に至る可能性のある複数の過去（記憶）が想起され、複数の可能性を探ることから離散の時間経過が創造され遷移的である。時間逆行の推察を伴うので、動きの概念の拡張方向が過去（記憶）志向に偏り、思考様式は時間逆行の推論（帰納推論や仮説演繹推論）に偏る（[4]：58 頁）。

1.3.　量化・関係化と意思決定

本稿ではライティング分科会で交わされた、言語社会集団内で相互理解に使う概念の在り方の議論を取り上げる。記号の象徴的な概念の位置づけを心的概念（[5]）と表象過程（[6]）から眺め、記号の進展の考え方（[7]：107 頁～ 165 頁）から捉え直すことで、前節で示したモノの実在性の二つの概念が、（1）出来事記憶を作るさいに与えられる記号操作の規約（線形性や階層性（[7]：134 頁））の影響を受けていずれかに偏ること、（2）因果に対する認識的態度（原因・理由に重きを置くのか、結果を大事にするのか）が言語的世界（[8]：32 頁）の意味として、実在性の概念に対し、より強固にその偏向（量化や関係化）を促す（再学習する）ことを主張する。

したがって語が表す意味の差異は、とりわけ出来事連鎖を叙述する表現－文章の筋書きの中心にある因果連鎖を表す文法形式の違いに明瞭に表れる。社会集団内の行為において互いに行動変容を促すための因果の捉え方であるから言語社会集団がもつ社会的習慣としての思考の偏りが表現の特徴に反映するだろうと考える。

概念あるいは意味であれ想起できることの根源事象は記憶である。次章で記憶について概観し、意味記憶と出来事記憶や予定記憶の違いを確認したあと、3 章では表象と言語性記憶の関わり合いについて記号過程（[7]、[8]）の考え方を基にして議論する。4 章でいくつかの心理学分野のコメントを紹介して、二つの言語的世界（量化と関係化）の分岐が、名付けられ整理された概念心像（記号の象徴的な概念としての）意味記憶が知覚経験基盤から言語社会基盤に推移するさい現れ、社会集団内での通話（コミュニケーション）においてより顕著にその違いが表面化すると考える。

第三者としてこの議論を少し離れて見てみると、本分科会は益々二つの基本概念区分けを極論する傾向が強くなっている。何故ならライティング分科会は、規範的な取り組みを一貫させようとするが、論旨展開の筋書きには二つの型（説得型と共感型）があるという期待に基づいて文章論を展開しているからだ。意識潜在する期待を拠り所とするのは立派な確証バイアス（[9]：166 頁）ではあるものの[1]、本分科会は象徴的な概念とは想像を超えて複雑な多相体であることも弁えてはいるつもりである。

2　記憶と語の概念・意味

2.1.　記憶の分類

記憶の類型を神経心理学の視点から整理した図（[5]：24 頁の図 6 から引用）を示す（図 2）。脳科学者の山鳥によると神経心理学の観点から意味記憶は、ここ今の心的表象（2.2 節）あるいは作業記憶（3.4 節）から分離され把持されることで概念操作が可能な記憶単位となるといい、作業記憶は登録され意味記憶は把持される。（[5]：28 頁）。また、意味記憶は操作対象としての心的表象（概念）であり組織化された一種の心的シソーラスであるという。その心的表象の多くは言語記号で置き換える処理が施されるし（[7]：83 頁）、個人的な記憶と社会で共有可能な記憶の区分も認められる（[7]：17 頁）。

予定記憶は展望記憶ともいい、展望記憶（[10]：61 頁）には強力な推論能力（思考力）が要る。事象記憶は

1　「ものの」は、接続助詞「が」（逆接の意味でない）と交替可能で、そのことは「もの」が役割実在を意味しているからだろう（「の」は認識視点であることを示す）。

出来事記憶とも呼ばれ、認知心理学者の太田（[11]）によると、出来事記憶から意味記憶を分離したのは心理学者の Tulving である。Tulving は「記号や概念を操作する時のもろもろの約束事も意味記憶に属する」とし、この意味記憶を言語使用に必要な記憶に制限したが、現在、その適用範囲は拡大しているという（[5]：16 頁）。

図 2　記憶の区別とその特徴（ [5]：図 6 を引用）

記憶の観点から概念は、意識化でき且つ陳述できる（言語表現が可能な）記憶で、認知科学者の佐治によると『有限の認知能力をもった人間が開かれた世界における情報を効率よく眺めるための記憶のまとまり』である（[12]：48 頁）。意味記憶あるいは知的な記憶と呼ばれていて、日々の生活の出来事の記憶である生活（出来事）記憶が連続的に継起する事実の記録であるのに対し、意味記憶は抽象化された記憶である（[5]：15 ～ 16 頁）。

2.2.　記憶の単位

意識が混濁した心身状態では記憶ができない臨床的事実から物事の記憶には覚醒意識が必要である（ [5]：152 頁）。神経科学者のギンズバーグら（[6]：159 頁～ 162 頁）は、「カテゴリー化し、動機付づけを行う感覚状態としての心的表象」という節の中で、「表象は特殊な目的機能的写像」であるとし、心的表象を『主観的に体験される表象』と捉えている。目的の下でもたらされる表象を『「～として」知覚することは、対象やその特性を動的な神経構造に写像し、それらを結びつけてカテゴリー化する能力に依拠している』と説明し、記憶があることは『写像関係が潜在的状態として動的に維持される』（[6]：161 頁）ことであると説明する。

山鳥は、記憶の単位を分離表象（心が分離可能な心的表象）と呼び、この心像（心的表象）には、知覚を介して入力される感覚情報から構成される知覚心像と、創造する心像である抽象心像があるという（[5]：152 頁～155 頁）。例えば、描画発達過程の研究によると、幼児は 2 ～ 3 歳頃に基本的なパターン図形を描くようになる。やがて基本図形を組み合わせるようになり 3 ～ 4 歳頃には人の顔のような絵を描くという（[13]：12 頁）。直線や円などの基本的なパターンは抽象心像の記号化であり、記号の組み合わせで人の顔の絵が生成されるといえる。

2.3.　記憶の基盤

記憶基盤の本質－脳の解剖学的な見地からの解説は、山鳥（[5]：127 頁～ 150 頁）に詳しい。本稿では、個人の記憶と集団の記憶を区分する観点から 1.3 節で知覚経験基盤と言語社会基盤という表現を用いた。これは以下の感覚運動的基盤と社会的基盤に対応する。佐治（[12]：63 頁）は、認知科学の観点から意味の成立に関与する感覚運動的基盤と社会的基盤を説明した上で、この基盤モデルを前提とすると『世界の言語の意味体系は普遍性と個別性の双方を担うことになるだろう。』と言及している。感覚運動的基盤とは、意味の在り処を人間に内在する『一般的認知能力、特に感覚運動的特性に関連付けて捉えようとする』考え方で、後者は言語話者に外在する『社会的習慣も含めた百科事典知識の一部として捉えようとする』見方である（[12]：60 頁）。

ライティング分科会では、他からアクセスが不可能な私秘的な記憶は知覚経験基盤に在り、言語性意味記憶は、言語社会集団内で共有もできる共通（言語社会）基盤にもあり、抽象的で普遍的な意味が通話において使われているのだろうと考えている。例えば、この共有基盤をギブソン（[14]：281 頁の図示）は、生体心理学の視点から社会的慣習に依拠する心理学的連合であるとする解釈を示している（図 3）。

アクセス不可能性について、宗教学視点から唯識論（[15]:20 頁）は、外界の物理実在を否定するのではなく、人は自分という世界に閉じ込められ、『すなわち自分の心のなかに自分が認識しているあらゆる存在があります』と説くが、コネクショニストモデルの発達によって、図 3 のパーセプト部分も深く掘り下げて研究されており、「自分の心のなかに自分が認識しているあらゆる存在がある」ことを説明する知覚推論（[16]：19 頁～ 63 頁）の考え方が提唱され、その数理モデルも提案されている（[17]）。

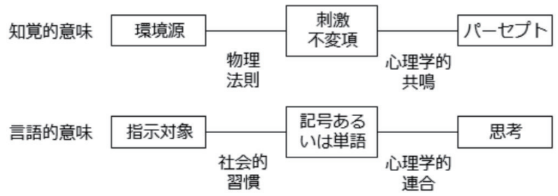

図 3　刺激作用における情報の 2 つの概念
（[14]：281 頁の図を引用）

山鳥（[5]：86 ～ 89 頁）は、語の意味の形成枠組みを提案し、その中で語彙の意味が非言語性の意味と言語性の意味から成り立つことを示している。前者は視覚や聴覚など知覚表象からなる複合表象であり知覚様式の横断性が必須であるという。後者は記号様式による言語性の表象で、山鳥によれば、複合様式の名付けだけでなく言語性の表象内だけで概念を構築できるといい、理解障害の分析による成果から意味のカテゴリー化機能を紹介している（[5]：88 ～ 107 頁）。

3　世界の見え方と量化・関係化

3.1.　二つの注意

神経心理学の観点から意識された知覚における注意とは、山鳥によると『注意は意識を一定の処理課題に集め、その処理を効率化する働きである』といい、二つの注意－空間性注意と時間性注意がある（[5]：28 頁）とし、記憶障害の研究から二つの見当識があることが分かっている（[5]）。見当識とは、『自分を大きな時間空間的環境の中に定位する能力』で、二つの区分とは空間見当識と時間見当識である（[5]：28 頁）。こうした二つの時空間志向の注意があることから [3]、[4] で挙げた不動点と不変点でのモノの標本化の考え方は神経心理学的にも妥当なようである。

3.2.　心的表象の記号化

心的表象は記号過程（[8]：22 頁）を経て象徴的表象として意味や概念を担う（[6]：160 頁の図 8.3）。主な記号はことば（言語記号）で、いわゆる母語能力は言語社会集団内での学習に拠る。母語能力と脳の発達（重量）の相関も知られており、飯島・酒井（[13]：99 ～ 107 頁）によると、成人の脳重量比（平均）で 50%を超える頃（生後 6 ～ 8 カ月）に喃語 [2] が現れ、生後 10 ～ 12 カ月（60%）で単語が発話される。そして生後 2 年で 2 語文に至るといい、文が連鎖する（3 歳）頃には脳重量は 80%に達していて、12 歳頃の感受性期 [3] には 100%に至る。さらに音韻と語彙の意味では脳の賦活領域が違うこと、文法と文章理解でも神経活動領域の違いが明らかにされている（[13]：102 頁、図 18）。

このように言語記号の様式で表す意味記憶は 1 歳を過ぎると急速に増加するが、出来事記憶は 3 歳以降になって形成される（[13]：9 頁～ 11 頁）。そして出来事記憶のほうが遅く、ここ今を知覚することで獲得する意味記憶に対して、過去を想起させる出来事記憶は、出来事生起の順序（前後関係）や、自己がここ今につながる連続性の意識も必要となることから関係知識を学習すると同時に、表現規模が大きくなるから記号連鎖のさせ方－単語を順序だって配列する線形性（[7]：107 頁～ 165 頁）の学習負荷を想像させる。

3.3.　記号の象徴化

山鳥は、自己が直接経験する出来事記憶と、なんらかの情報媒体（メディア）を介して間接的に受け取った出来事記憶を区分していて（[5]：13 頁）、記憶の成立基盤が異なっていることをその理由に挙げている。山鳥は『前者では身体情報も含めた全感覚情報（認知系、運動系、周縁系）が動員されるが、後者では新皮質の遠隔情報受容機構（聴覚 / 視覚 / 言語系）が主に動員される』ことを指摘している（[5]：13 頁）。また、前者を自伝的記憶、後者を社会的出来事記憶（[5]：67 頁）ということもある。後者の情報受容にある言語系の情報媒体の主たるものは記号である。モノの場合、指示的記号が使われることもあるが基本的にモノの動きから創作されるコトの表象に対する記号の象徴性は高い。モノとコトを組み合わせて出来事を表すことができるが、出来事の連鎖のさせかた（出来事記憶を叙述する規約である文法）なども象徴性が高いと考えられる。

社会言語集団がもつ集団記憶としての表象に付与する記号は集団の共有信念に拠るだろうから必然的にその象徴性は高くなるはずである。思考の単位である概念を、山鳥（[5]：153 頁）は、『名前とそれに対応する心像の複合体』と定義するが、「仁義礼智」の「義」の概念

2　喃語（なんご）。幼児のまだ言葉にならない発声を指す。
3　皮質再編成の柔軟性が失われる時期をいう（[5]：101 頁、[24]）。あるいは臨界期とも呼ばれる。

について触れ、利他的行動が、『集団構成員のすべてに共有されたからこそ、その抽象心像を「義」という言葉で切り取り、概念化することが可能になった』（[5]：154 頁）と概念の集団学習の過程を指摘している。

ギンズバーグら（[6]:161 頁）のいう表象が持つ「目的機能的写像」の考え方から、記号連鎖を使った世界の叙述という行為が言語社会集団の構成員どうしの情報の共有（あるいは感情の共有）といった社会的出来事として目的化することで象徴化が進むと考えることができる。ライティング分科会では、言語学者であるエヴェレットが提示する記号進展（[7]：39 頁の図 1）に、とくに文法構造が強く影響する象徴化の過程を観察することができると考えている。

この記号進展（[7]：107 頁～ 165 頁）の考え方に拠ると、パースの記号論（[18]）の記号分類と記号連鎖にみられる構造化（二重のパターン化）から言語進化の過程が説明できるという。彼に拠れば、記号の進展の図（[7]：39 頁）の図 1）にしたがい記号を連鎖するさいに二重のパターン化が行われ、複雑さの異なる 3 つの文法（線形性 /G1、階層性 /G2、再帰性 /G3）への移行が生じ、現代的な意味でいう言語になるという（[7]：40 頁）。

記号連鎖におけるパターン（線形順序から作られる構造）の学習には教師としての言語社会集団の役割がさらに大きいと考えられ、ライティング分科会は、（3.2 節で示した）意味記憶と出来事記憶の学習期にズレが生じている点に着目し、知覚入力からの学習によって名付けられた概念心像（意味記憶）が、文法構造（二重のパターン化による線形順序から作られる構造の規約）の介入によって、モノが表す実在性の概念の偏向が促されることを主張する。その偏りは概念の社会的学習の過程でより顕著になるのではないか。

本分科会は意味や概念が抽象的になるほど、そして構造性を駆使した複雑な文法構造が導入されるほどその傾向が強くなると想定し、（ここ今から）離れた－高い象徴性（[19]：228 頁～ 242 頁）を持つ概念からなる文書叙述で大きくなり、対立するモノの二つの見方に違いが生じると考えている。

3.4.　作業記憶と意味記憶

図 4 は生活時間軸上で記憶がどのように関連づけられるかを示したもので、（ [5]：175 頁）の図 47 から引用した。山鳥は、無常のここ今に持続する感覚入力（作業記憶やワーキングメモリ）を積み重ねることで形成される自己意識を説明する中で、「この 3 種の記憶（手続き記憶、出来事記憶、意味記憶）は過去を現在化させる働きを担っている」（[5]：174 頁～ 175 頁）という。そうすると手続き記憶の再演（シミュレーション）や、継起する出来事記憶を組み合わせた記憶操作（推論操作）によって未来が現在化され、予定記憶となるのかもしれない。なお、意味記憶と出来事記憶の特徴区分については、太田（[10]：70 頁～ 74 頁）に詳しい。

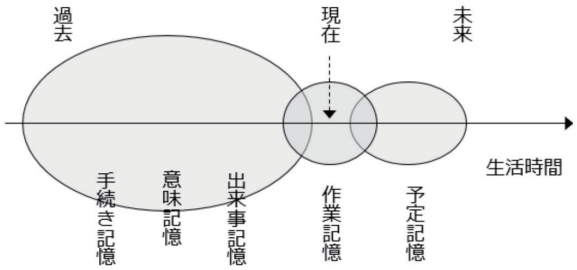

図 4　時間の流れと諸記憶の関係
（ [5]：175 頁の図 47 を引用）

出来事は生活の記憶であるし、山鳥が指摘するように『厳密な意味では、それぞれの出来事は一生に一回しか生起せず、時間情報・場所情報・感情経験を伴う』（[5]：11 頁）。日常経験する全ての出来事を記憶することはできないし、何より無常のここ今を「それぞれ」の出来事に区分けするには、離散化とその尺度が必要で、動きはその区切り方を学ばなければ、記憶対象の心的表象として固定できない。さらに言語社会集団内の他の仲間と共有するためには規約の共有（集団学習）が必要である。

次に出来事間の連鎖に見出すことのできる関係の抽象性がある。いわゆる因果性は、それが何を表すのかと、因果性は実在するのかという二つの問題がある（[20]：3 頁）。我々は、空間や時間を直視できないのと同様に、因果性も直視（知覚）できないし、観測装置や計測装置を使って間接的にも直視（知覚）できない。したがって知覚運動基盤としての参照先がないから、概念間の関係や推論などについての知識は、ここ今の作業記憶にある直接指示物の感覚入力から直接組織されない抽象心像（創造する心像）の記憶であると考えられる。こうした予定記憶を作り上げる因果性の表現に至り、対立するモノの

二つの見方にはより鋭利な違いが生じると考えられる。

3.5.　作業記憶と文化介在

出来事記憶を作るさいの規約と共有のこと、出来事間の関係が創造された心像であることから、ライティング分科会では、こうした知識の在りかを確認するため、認知心理学の視点から整理された記憶分類（図 5）を確認するとともに、出来事記憶に先立つ単語記憶（2.2 節）が意味記憶として知覚経験基盤からどのように言語社会基盤化するのかについて検討している。

図 5 は（[10]：22 頁）の図 3-1 から引用した図で、刺激（入力）に対する反応（出力）の観点から記憶を分類している。展望記憶は、意図記憶とか未来記憶と呼ばれ、図 2 の予定記憶と同じである。

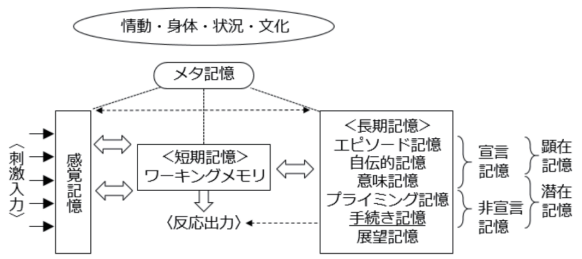

図 5　記憶の分類（ [10]：22 頁の図 3-1 を引用）

図に示されるように短期記憶の上部にメタ記憶が位置付けられていて、「これは、記憶に関する知識の記憶や、記憶活動のモニタリングおよびコントロールを行う記憶」（[10]：22 頁）である。ライティング分科会は、図に示される分析枠組みを参考として、メタ記憶の形成に影響を及ぼす「情動・身体・状況・文化」のうち、文化介在に着目した（[7]、[21]、[19]）。というのもビジネスという分野は広い意味での文化活動であるし、ビジネス文書が言語社会集団内で流通する文章であること、読み手の行動変容に繋がる書き方（合理的な思考の表現）であるからだ。

4　量化・関係化と判断

4.1.　概念の違いと判断

書き方読本（試作版）（ [1]）では、動きの概念の作り方をモノの在り方をから捉え直した。つまり動きの意味を内省的に判断するのではなく、モノの在り方から制作すると考えるもので、説明的に表現展開している。本稿では、思考の基本要素－記憶と概念化、概念の記号過程においてモノの在り方が性質を異にすることを示した。

説明要素の多くは、従来から示され指摘されていたことであるがライティング分科会としての議論の注目点として挙げるとすれば、・モノの概念化の 2 つの手段は、コトの概念化も含めて量化（数）と関係化（結びつき）という 2 つの叙述区分につながっていること、・とくに出来事記憶や予定記憶の作り方では、象徴的な意味の形成のため言語社会集団の影響力が大きい、・出来事連鎖の叙述は思考様式が反映されるからモノの概念化が再学習され、いっそう偏りが生じる傾向にあるという点にある。

上述のように名付けられ整理された概念心像（記号の象徴的な概念としての）意味記憶が知覚経験基盤から言語社会基盤に推移するさい顕著にその違いが表面化すると考える。二つの基盤の違いを個別と普遍と言い換えると表 1 のようにまとめることができる。

表 1 個別と普遍（基盤の違いの言い換え）

	数える世界	関わる世界
個別の意味	意志的動き （行動）	感受的把握 （感情）
普遍の意味	モノの位置移動	モノの質変化
受容 （経験と感受）	空間的注意 （個別のモノへの注視集中）	時間的注意 （周囲とモノとの関わりに集中）
判断 （推論）	より後の推察 （確定的、演繹的推論）	より前の推察 （仮定的、仮説演繹的推論）

4.2.　言語社会基盤の影響

感覚入力から直接組織されない抽象心像（創造する心像）の記憶である概念間の関係や推論などについての知識は、文化介在の圧力が強いことが予想され、出来事連鎖の叙述法（推論の仕方）は多様であるに違いない。

個体が他者の影響を受けながら学習することを社会的学習といい（[22]：35 頁）、文化進化を主張するヘンリックはヒト科（チンパンジーとオラウータン）の中で、空間認知や量概念についての認知機能テストにおいてヒトは大して成績に違いがないが、社会的学習の正解率はきわめて良い成績を修めることを指摘している（[22]：37 頁～ 41 頁）。

認知心理学者のマンクテロウは、『西洋人は、基本的帰属錯誤[4]を起こしやすい。すなわち、自分自身の行為を説明するときは自分を取り巻く状況に訴えるが、だれか他の人の行為を説明するときはその人の傾向（パーソナル特徴）に訴えるといわれている。』（[23]：325 頁～ 326 頁）と説明し、東洋人は、このバイアスに陥りにくいことの背景を『東洋人は、文脈変数を監視するという実践を積み重ねているので、単にこのことが容易なだけである』と説明する。ただ、両者の違いを実践の積み重ねに要因を求めている点は肯首しかねる。

日本語母語話者は、モノの概念が役割に偏向しており「自然とそうなる」という状態表現をしやすい文構造（G1、G2）を学習している。モノ概念の偏向から思考を支える推論特徴は、（既に述べたように）時間逆行の推察を伴うので、動きの概念の拡張方向が過去（記憶）志向に偏る。つまり状態の変化の推移が動きであるから、行為（動き）を表すことは周りの状態を記憶することにつながる。動きの概念形成の過程が違うと解釈することができる。

別の例を挙げると、佐治は思考における言語的世界の思考の枠組みの強固さを、第二言語習得の事例を挙げて説明している（[12]：250 頁）。中国の大学で教育を受ける日本語と韓国語の学生の調査例を示し、『彼らは中国語でのコミュニケーションに問題がないが、動詞を運用するさいの意味体系がそれぞれの母語の体系に則していた』という。そして『言語的知識は一種の素朴理論である、世界の見方を限定する』（[12]：250 頁）と指摘する。

Tulving のいう意味記憶であっても、予定記憶や出来事記憶（や予定記憶）が区別されるから、出来事表現である文という記号連鎖や、因果性を表す出来事連鎖（文連鎖）の叙述法の学習には、言語社会集団が持つ思考様式の偏向が色濃く表れる。こうした特徴が文法学習に強く介入するだろうし、これは言語の線形性や構造化の手段の学習である。記号の進展の考えを説明するエヴェレットは、『言語が採用する語順は、その社会の歴史に影響を与える文化的な圧力の結果である』（[7]：357 頁～358 頁。」）と指摘する。記号の進展の図（[7]：36 頁）にある階層性や再帰など記号連鎖における線形パターンの学習には、象徴性が高いほど推論表現（出来事の順序の把握の仕方）の影響が強く現われると考えられる。

4 fundamental attribution error 行為者 - 観察者バイアスのひとつ。

5 おわりに

5.1. 概念の在り方

2.3 節で示したように記号が持つ個別（トークン）と普遍（タイプ）の概念や意味の違いには大きく二つあり、量化世界の個別と普遍の違いと関係世界のそれである。前者は可知性のある全体を前提とした集合における個体の個別性とその集合論的な普遍性で、後者は可知性のない全体（部分集合族による被覆）における同値関係による個別性とその位相論的な普遍性であろう。書き方のまとめとしては以下である。

文章内の合理的な筋書き（道筋）は、ことば（記号）を集団学習された普遍の概念・意味で使うことを意識し、説得型あるいは共感型の表現スタイルを選択することで決める。前者は量化されたモノ（数える）世界を描くことになるので、原因･理由が結果を内包するように、概ね確定的に結論付けたり判断したりするよう論を進める。結果に先行する原因・理由が重要なので、重要な要素を先に述べてからより後の結果につながる要素を述べる。後者は関係化されたモノ（関わる）世界を描くことになるから、結果に至る原因・理由の尤もらしさに拠って、総じて仮定的に判断するよう論を進め、尤もらしい原因・理由を述べたあと重要な要素を後に述べる。

5.2. 再学習される概念

これまでにライティング分科会は、文章構成のさいに使う筋書きに説得型と共感型の二つのスタイルがあることを提案し、それぞれが思考の基本である概念の作り方と、その作り方に応じて出来事（動き）の捉え方に違いが生じることを示してきた（[1]）。その違いは出来事連鎖の叙述法（推論過程の表出）に関連し、言語社会集団内での再学習を通じて実在性の概念の偏りが促されると考えられる。

横井（[2]）の文章作成モデルは、思考操作と叙述を切り分ける重要性を指南した。表現を中心にして思考の操作方法、思考表現の記述特徴や表現の叙述方略に分解して考察することを教えたのであるが、動きはその区切

り方を学ばなければ記憶対象として固定しないこと、因果は直接知覚できるものではないことなどから出来事記憶や出来事連鎖の叙述方略には言語社会集団の介入が不可欠で、そのさいにモノの概念が再学習され偏向（量化と関係化）が生じるのだろう。

本稿では、動きの概念を特徴づける変化の記憶は、持続する時間の区切り方に依存しており（[3]）、その区切りは社会言語集団が創作すること、創作に仕方は、出来事連鎖の認識の仕方（文化背景）によって違うことから、表現される内容が異なることを議論してきた。今後もライティング分科会では、文化が叙述に及ぼす傾向例を取り上げながら文章構成の特徴との関わりの議論を深めていくつもりである。

参考文献

[1] ライティング分科会，「産業日本語」 令和四年度 産業日本語研究会 報告書，特許情報研究所：一般財団法人日本特許情報機構，2023.

[2] 日本語マニュアルの会，“日本人のための日本語マニュアル（暫定第 1 版）,” 11 2018. [オンライン]. Available: https://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/.

[3] 佐野洋，“ビジネス文書の書き方読本―産業日本語研究会ライティング分科会編について，” 一般財団法人日本特許情報機構，東京都江東区，2023.

[4] ライティング分科会，「産業日本語」 令和五年度 産業日本語研究会 報告書，特許情報研究所：一般財団法人日本特許情報機構，2024.

[5] 山鳥重，記憶の神経心理学，医学書院，2002.

[6] シモーナ・ギンズバーグ、エヴァ・ヤブロンカ、鈴木大地訳，動物意識の誕生（下），勁草書房，2021.

[7] ダニエル・L・エヴェレット著、松浦俊輔訳，言語の起源，白揚社，2020.

[8] S.I. ハヤカワ著、大久保忠利訳，思考と行動における言語 原書第四版，岩波書店，1985.

[9] 情報文化研究所著、高橋昌一郎監修，情報を正しく選択するための認知バイアス事典，フォレスト出版，2021.

[10] 日本認知心理学会監修、太田信夫、厳島行雄編，現代の認知倫理学 2 記憶と日常，北大路書房，2011.

[11] 太田信夫、小松伸一，エピソード記憶と意味記憶，31 巻 1 号：教育心理学研究，1982.

[12] 佐治伸郎，“信号、記号、そして言語へ コミュニケーションが紡ぐ意味の体系，” 共立出版，2020.

[13] 岩田誠、河村満・編集，発達と脳―コミュニケーション・スキルの獲得過程，医学書院，2010.

[14] J.J. ギブソン著、佐々木正人・小山宣洋・三嶋博之監訳，ギブソン生態学的知覚システム，東京大学出版会，2011.

[15] 横山紘一，唯識の思想，講談社学術文庫，2016.

[16] ヤコブ・ホーヴィ著 佐藤亮司監訳，予測する心，勁草書房，2021.

[17] 乾敏郎 坂口豊，自由エネルギー入門 知覚・行動・コミュニケーションの計算理論，岩波書店，2021.

[18] 米盛裕二，パースの記号学，勁草書房，1981.

[19] 小山亘，記号の系譜 社会記号論系言語人類学の射程，三元社，2008.

[20] スティーブン・マンフォード、ラニ・リル・アンユム著、塩野直之 谷川卓訳，哲学がわかる因果性，岩波書店，2017.

[21] ケイレブ・エヴェレット著、屋代通子訳，数の発明 私たちは数をつくり、数につくられた，みすず書房，2021.

[22] ジョセフ・ヘンリック著、今西康子訳，文化がヒトを進化させた，白揚社，2019.

[23] K. マンクテロウ，思考と推論，北大路書房，2015.

[24] 鍋倉淳一，発達期における脳機能回路の再編成，8 巻（1-16）：ベビーサイエンス，2008.